

# 平成 22 年度最終報告書

被助成者 (特活) 開発教育協会 印

コード  
番号

10-A-037

## 食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」普及推進事業

### 1. 活動の目的と背景

(特活) 開発教育協会では昨年度、「食」を通して環境・貧困・グローバリゼーション・格差社会の問題や文化の多様性、豊かさをめぐる価値観のあり方などについて考える食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」を作成した。プログラム内の具体的なテーマは、「宗教」「文化の多様性」「自給率」「ごみ」「食の変遷」など多岐にわたり、前述した問題の解決に向け、自分と社会のあり方を主体的に考える内容となっている。本事業は、既存の食育教育にとどまらず、より広い視野と問題意識を持った食育の普及推進を目的とし、当学習プログラムの体験講座を全国で実施し、実践者の養成を行う。学校および市民学習の場で、身近なことから社会の問題や地球的課題へと関心を持てるようになる教育活動を希望する人は昨今増加してきているが、時間的・技術的な問題により実践へ踏み出せない人が多い。よって、全ての人々にとって日々の営みである「食」を通しての学びを確立させ、普及していくことは、すでに開発教育を実践している人たちだけでなく、あらたな実践者を育成・支援することにもつながると考えられる。

### 2. 研究活動の内容と方法

#### 1) 実行委員会の立ち上げ、委員会の開催

食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」の作成者を中心に、実行委員会を結成する。実行委員会が事業の計画・運営を担う。共催団体の選定、講座の内容などを協議しながら決めていく。

#### 2) 食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」体験講座

開発教育に限らず、環境教育・食育・平和教育などに関心を持つ人を対象に食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」の実践者を養成することを目的とした体験講座を全国で実施する。東京以外での開催の場合は、共催団体を募集し、参加者の募集と当日の運営を担ってもらう。講師は実行委員が務める。

#### ■体験講座の概要

当協会が会員とともに開発した食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」は、昨年度、教材『写真で学ぼう！地球の食卓学習プラン 10』として発行された。今回の体験講座は、その教材を元にしたワークショップと実践のためのこつやアレンジ方法の解説、質疑応答を基本構成とした。



教材では世界 24 カ国 30 家族の写真を使用

### 3) 講座後のサポート、実践事例の収集

講座参加者が、各自の活動の場で食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」を実践する際のサポート体制を整え、当学習プログラムの実践を促進する。また、彼らの実践事例を収集する。

### 4) 実践事例の共有、活動報告

食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」の実践事例を紙媒体またはウェブ媒体で、広く提供・発信する。それにより、より多くの人々が当学習プログラムに関心を持ち、ひいては自主的に地球的視野を持った食育に取り組むことを目的とする。

## 3. 活動の実施報告

### 1) 実行委員会の活動

実行委員会は、事業の全体計画・運営を担い、主に以下の業務を行った。

- ・ 体験講座の共催団体の選定
- ・ 広報手段の検討、広報の実施
- ・ 講座内容の検討、講座用学習ツールの作成
- ・ 講師として共催団体とともに講座の実施

実行委員会とともに、各地の講座の実施には、共催団体が大きく関わる。共催団体は、事業の目的に賛同するうえ、会場の手配、広報、当日の運営ができる団体を選出した。共催団体決定後、食育プログラムと講座の広報ちらしを作成し、広く頒布する。

### 2) 食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」体験講座（全12回）

体験講座を全国12か所で実施した。

#### 《体験講座① 沖縄県浦添市》

実施日：2010年12月5日

共催団体：沖縄開発教育研究会

参加者：24名

内容：テーマ「いただきます」と「未来の食卓」のアクティビティを実施した。写真は、ブータン、インド、アメリカ、クウェート、日本を使用。参加者の大半が教員で、すでに教材を利用したことのある教員も数名いたため、具体的な生徒の反応や教材の活用方法についても意見交換がされ、実践に即した内容となり、好評だった。開催地沖縄の独自の文化や、日本・アメリカ・移民の文化の影響をうけ、食が変化してきたことについても意見交換できたことは意義深かった。

#### 参加者の感想

- ・ 一枚の写真から、文化や環境、社会情勢まで考えさせられることが出来ると感じた。教材の使い方が幅広くて、とても興味が湧いた。是非実践に活かしたい。
- ・ 『地球の食卓』の写真や食をテーマのワークショップによく使っていたが、食という一つの視点から、ライフスタイルの変化、社会事象との関係性や世界とのつながりを再認識することが出来た。

## 《体験講座② 大阪府大阪市東淀川区》

実施日：2010年12月11日

共催団体：特定非営利活動法人コモンビート

参加者：33名

内容：ドイツ・アメリカ・中国・エクアドル・ブータン・日本の写真を使用し、グループでフォトランゲージを行う。写真から色々と読みとることで出てきた“食”に関する気づきを拾い上げながら、食料自給率・食料廃棄・フードマイレージ・ハウス栽培と地球温暖化などについて説明する。最後は、理想の食卓＝地球と人にやさしい食卓（持続可能な食卓）という共通理解を前提に、理想の食卓を目指して、「私が、周囲の人と、地域で、国・地球全体で」「今日、3か月、1年、10年以内、いずれ」したいこと、できること、めざしたいことのブレインストーミングを行い、相互に質問、解説を行う。



### 参加者の感想

- ・日本の食、世界の食について学べた。グループトークなどで、みんなの考えを聞いたり、一緒に考えたりがよかった。ムダを無くす、お米を食べる、など、今日からできること、これからできることを考えて実行していきたい。1人1人の小さな事が、日本・世界の大きなことにつながっていくのだと思った。
- ・今後も、開発教育協会のワークショップに参加して学び、周りの人に伝えていきたい。

## 《体験講座③ 東京都武蔵野市》

実施日：2010年12月18日

共催団体：武蔵野東小学校環境部

参加者：50名

内容：テーマ「食卓からでるごみ」と「フードマイレージ」のワークショップを実施する。「食卓からでるごみ」では、ドイツ・トルコ・ブータン・日本の写真の家族の食事からでるごみをリストアップし、その内容を比較する。各国のごみの特徴を話し合いながら、生ゴミの処理やドイツのデポジット制度などについてクイズ形式で説明する。製品のライフサイクルの各段階で多くのエネルギーが消費されていることを学んだ後、私たちの生活でごみが多くなった理由について考え、ごみを少なくするためにできることを話し合った。話し合いの内容は、3Rや政策についてだけでなく、働き方や休日の過ごし方にまで及んだ。

「フードマイレージ」では、自給率の種類と各数値の意味することを学んだ後、自給率が低く、フードマイレージが高い日本の現状は、地球環境／日本の農家／海外の国々／私たちの生活にとってどのような影響があることなのかを考え、模造紙にまとめる。模造紙にまとめる過程で、グループごとに様々な意見が出てきた。

### 参加者の感想

- ・今回の講座には、色々なメリットが含まれていて、とても有意義な時間が持てた。自分の生活を再度振り返るきっかけになったこと、グループでディスカッションをしたことで、周りの人の考えに共感し、新たな考えを学べたこと、海外の人の生活を垣間見られたことなどが良かった。また、「写真」という1つの教材で、授業が色々な方向へ発展させられることも勉強になった。同じ職業を長く続けていると、ついつい視野が狭くなりがちだが、このような講座に参加できたことで、授業の幅も広がり、「学校」以外の世界のことをまた1つ知る機会になった。

#### 《体験講座④ 徳島県吉野川市》

実施日：2011年1月9日

共催団体：特定非営利活動法人TICO

参加者：11名

内容：テーマは「フードマイレージ」。アメリカ・グアテマラ・中国・キュート・日本の写真を使用し、フォトランゲージを行った後、各国の品目別自給率について予想する。各国の自給率から換金作物の問題や、先進国の農業補助金、ダンピングについて学んだ後、日本の食料自給率について見ていく。食べ物の多くを他の国から輸入することは、地球環境に／日本の農家に／私たちの生活に／他の国にどのような影響があるかを考えた後、自給率が低くなった理由についてブレインストーミングを行う。最後に、今後食料生産と食料消費をどのようにしていきたいか、していくべきかについてグループ内で話し合う。参加者が、環境問題・国際協力に関しての意識は高かったため、様々な意見が出てきて、全体として良い学び合いになった。



#### 参加者の感想

- ・「地球の食卓」の教材を購入し、事前に教材研究をしたが、実際に今回の講座を体験してみて、多様なアレンジができることが分かった。様々な省庁や機構のホームページから数字を持ち出し、身近な食べ物と関連付けて、ワークショップを進めていくことで、参加者が理解しやすく、また考えを深めやすいものだった。

#### 《体験講座⑤ 愛知県名古屋市》

実施日：2011年1月24日

共催団体：特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク

参加者：12名

内容：アメリカ・エクアドル・トルコ・ブータン・日本の5つの国の写真を使い、グループごとに「健康で長生きしそうな家族」「ごみが多くでそうな家族」「食事に招待してもらいたい家族」をテーマにランキングを行なう。ランキングしていく過程で話し合われたことを全体で共有することで、食を通して見えてきた家族の問題に気づき、また、多様な価値観の意見に触れることができた。最後に自分の食生活について振り返り、どのようなことを大切にしていきたいかを話し合う。

#### 《体験講座⑥ 岐阜県安八郡》

実施日：2011年1月24日

共催団体：特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク

参加者：10名

内容：キュート・ボスニア・ヘルツェゴビナ・マリ・ブータンの写真を使用し、フォトランゲージを行った後、各家族の信仰する宗教を予想する。正解はブータンがチベット仏教、その他3家族がイスラム教であり、参加者はアフリカやヨーロッパにもイスラム教徒が多くいることを知る。その後アラブ料理とブータン料理を食べる。各料理に国に合わせた食前の言葉も学び、料理の特徴について気づいたことを話し合う。最後に、仏教とイスラム教の教えで食に関わる教えを学ぶ。普段知る機会が少ない、イスラムの文化を食を通して知り、また、最も身近な宗教である仏教との間に共通の教えがあることが新鮮な発見であった。

## 《体験講座⑦ 東京都豊島区》

実施日：2011年1月29日

共催団体：立教大学ESD研究センター

参加者：24名

内容：テーマ「いただきます」「おいしい食べ方」「食料自給率」の3つのワークショップを行う。「いただきます」では、クイズを織り交ぜながら宗教が食生活に関わっていること、宗教の教えの中に食べ物や命の大切さが含まれていることを学んだ後、「いただきます」の言葉に込められる思いについて各自が再考する。

「おいしい食べ方」では、様々な食べ物をいつもと違う食べ方で実際に食べ、気づいたことを話し合う。その後、箸食文化・手食文化・カトラリー文化の特徴について説明する。想像だけでなく、実際に様々な食べ方で料理を食べてみることで実感を伴った学びとなり、手食文化へのマイナスの先入観がなくなり、あらためて文化の多様性を感じる機会とすることができた。

「自給率」では、日本の写真の写っている食材の自給率について知り、気づいたことや意外だったことを話し合う。また、五目ラーメンに使われる食材のフードマイレージを計算し、食料の運搬の際に生じる環境負荷について学んだ後、運搬以外に使用される“食”に関わるエネルギーについて考えていった。その後、食べ物の多くを他の国から輸入することの影響について幅広い切り口から見ていき、余剰農産物購入協定や農産物貿易の自由化など、自給率低下のきっかけとなったいくつかの政策の説明を加えながら、自給率が低くなった理由についても考える。最後に、食料生産・食料消費をどのようにしていきたいか、していくべきかについてグループ内で話し合う。話し合いでは、具体的な行動がいくつも出てきて、参加者同士の学び合いが多いものとなった。

### 参加者の感想

- ・実際に実践するときのことを考えながら参加した。ワークショップの勉強になった。また、食について知らないことだらけであることが思い知らされた。食に対する意識が変わった。
- ・食糧自給率の問題と環境問題や生物多様性の問題がつながっていることを学んだ。子どもにとっても「食」は身近なテーマだと思うので機会があればぜひ実践したい。

## 《体験講座⑧ 愛知県日進市》

実施日：2011年2月13日

共催団体：財団法人アジア保健研修財団アジア保健研修所

参加者：30名

内容：テーマ「未来の食卓」を行う。色々な国の家族の食生活をランキングし、多様な価値観に触れた後に、自分達の食生活を振り返る。その後、日本と世界の“食”の変遷について説明がなされ、気づいたことを共有する。参加者の年齢層が幅広く、数十年前の日本の食生活について興味深い話もでてきて、変化のメリット・デメリットについて多様な切り口で評価することができた。最後は、“食”を通してよりよい社会・暮らしにつながるために出来ることについて話し合う。

### 参加者の感想

- ・やり方を応用して実践します。日本の学校の他に、アジア各地からの保健ワーカー対象の研修やフィリピンでのコミュニティプロジェクトの中の教育活動の一環として。
- ・大学の講義で学生に紹介したい。

### 《体験講座⑨ 福島県伊達市》

実施日：2011年2月19日

共催団体：特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク

参加者：約60名

内容：今回は実践者養成の他に、低年齢の子どもを対象にした学習プログラムの開発を兼ね、地域の子どもから大人が参加する寺子屋教室の機会を利用した。そのため、教員や国際交流協会の職員の他に、未就学の子どもやその親も参加した。テーマは「世界のおやつ、私のおやつ」で、グアテマラ・中国・トルコ・イタリア・日本の写真を使用する。はじめに行ったランキングの作業では、子ども達からユニークな意見がたくさんでて、大人達も真剣に彼らの意見を聞いていた。色々な価値観に触れた後、自分達の地域に目を向けた。参加者の中には、ご年配の方もいたため、昔から家庭で作られてきたおやつの話で盛り上がり、世代間の交流にもつながった。

#### 参加者の感想

- ・写真をみて、生命を支えてくれる食べ物を前に並ぶ家族の誇らしげな笑顔がとても印象的でした。今暮らしている土地と食べ物との深いつながりを感じました。

### 《体験講座⑩ 大阪府大阪市北区》

実施日：2011年2月24日

共催団体：特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク

参加者：15名

内容：豊かな食べ物に囲まれた私たちのくらしの裏側に目を向け、毎日を支える食を見直し、未来に向けて考えることをねらいとして講座を実施する。持続可能な社会を実現するために私たちにできることをウェビングしていき、“持続可能な”に込められた方向性について議論するなかで、食料自給率・飢餓・フードマイレージ・フェアトレード・貧困の解消と環境保全のつながりなどについて学ぶ。講座で得た知識を多くの人に伝え、生活のあり方を見直すきっかけとなる内容であった。

#### 参加者の感想

- ・お寺という世界以外、様々な社会情勢を知ることは非常に勉強になる。一般世間の道理なくして、宗教も成り立たないのもっと意欲的に他の事も勉強したい。

### 《体験講座⑪ 静岡県静岡市》

実施日：2011年6月5日

共催団体：常葉大学大学院国際言語文化研究科

参加者：31名

内容：テーマ「おやつで元気」と「未来の食卓」を行う。参加者の中に栄養士の方が何名かいたため、食文化の多様性や、おやつを嗜好と健康の視点から考えていく「おやつで元気」の学習はとても好評であった。「未来の食卓」では、過去50年の“食”に関する変化を様々な切り口から見ていった。その変化の社会的な背景と、メリット・デメリットについて議論を深めた後、理想の食卓について考えていった。将来、どのような食卓にしていきたいかを考えることは、世界の情勢や国の政策、個人の働き方にもつながっていくため、多様な意見がでてきて、参加者同士のなかで新たな発見が多くあった。講座最後には、学習プログラム

の応用方法について質疑応答の時間を多くとり、各自の今後の実践に向けて役立つ内容とした。

#### 参加者の感想

- ・「おやつ」という子どもにとって身近なものから多様な文化を理解していくという切り口が面白く、実際に授業ができたら楽しいと思った。また、子どもたちの反応がみてみたい。
- ・「食」ひとつとっても学ぶことがたくさんあり、それが勉強になることがとても興味深い。改めてどういふことを食育にてなげていけばよいかを考えた。

### 《体験講座⑫ 大阪府大阪市平野区》

実施日：2011年6月13日

共催団体：特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク

参加者：18名

内容：エクアドルとブータンの写真から自給自足で生活をしている家族について学んだ後、先進国であるアメリカとドイツの食や環境に対する姿勢の違いをみていき、さらに中国の都市と農村の家族を比較し、地域差とくらしの変化を発見していった。その後、日本の食をめぐる環境を過去・現在・未来の時間軸で追っていき、食を通しての世界のつながりや、こうあって欲しい未来の姿について話し合う。最後は、講座で学んだことを人に伝えるための補足解説を行う。

#### 3) 講座後のサポート、実践事例の収集

参加者のうち、連絡先を教えてくれた人には、その後の実践の様子を問い合わせ、また、実践の相談を受け付けていることをメールにて知らせた。この実践の相談と報告の受け付けは、現在（2011年9月）も行っており、今後も続ける予定である。相談で最も多いのは、小学校で実践する場合のアレンジ方法である。

#### 4) 実践事例の共有、活動報告

本事業において実践した学習プログラムの内容を当協会のホームページ上にて公開した。実践の参考になるよう、進め方が分かりやすいかたちで紹介した。また、今年度中に当協会から発行される小学校における開発教育の授業実践集にも掲載する。電子媒体・紙媒体で広く一般に提供・発信することで、地球的視野を持った食育に取り組む人が増えると考えた。

## 4. 活動の成果

### 1) 講座参加者による実践の広がり

全国10ヶ所以上で食育プログラム「食を通して世界を学ぶ」の体験講座を実施することができた。講座参加者は計318名である。参加者にアンケートを行った結果、教育の実践の場を持っている人のほとんどが、「実践したい」と回答した。「どのような場で実践しようと考えていますか？」の質問には、以下のような回答が書かれた。

- ・小学校（総合、国際理解関係の授業、外国語活動、道徳）
- ・中学校（総合、社会、英語）
- ・大学の授業
- ・教員研修

- ・栄養指導、食育の授業
- ・仲間とのイベント
- ・家族

これらの回答から、本学習プログラムが、学校教育だけにとどまらず、一般市民、身近な存在である家族や友達も対象にすることができることが分かる。学校教育においては、小学校から大学まで幅広い年齢層に、かつ多様な教科にて適用できると教師が考えたこともうかがえ、今後の学習プログラムの普及が多いに期待できる。特に、当協会においては長年、小学校で活用できる開発教育学習プログラムの開発が課題となっていたため、開発教育の裾野を広げる点でも、参加者のこの回答は意義深い。各講座での実践に関する質疑応答からも、参加者により今後実践が展開されていくことが確信できた。

また、大学関係者や教員研修に携わっている人は、担当講義の受講者に将来教育に関わる人が多くいるため、事業の波及効果を高める要になると考えられる。

本事業に賛同し、協力してくれた共催団体からも、期待していた成果が得られたとの評価をいただくことができた。以下のアンケート回答からは、講座参加者の今後の活動を期待していることも分かる。

(共催団体アンケート回答)

- ・参加者全員が「今後いずれかの場所で実践したい」と(アンケートで)答えている。
- ・参加した先生方等には、具体的に自身が実践する場面をイメージしやすかったようだった。
- ・参加者からの反応もよく、評価も高かった。また皆が発言でき、積極的に取り組める場を提供していたので、参加しやすい雰囲気であった。
- ・ビジュアル教材が多く、常に参加型で進行されていた点は非常に参考になった。今後実施する上でアレンジして活用していきたい。
- ・ねらいは達成できた。参加者の皆さんも、とても積極的に意見を述べていた。
- ・参加者の今後の実践結果を聞くのが楽しみである。
- ・今回の学習プログラムのような、誰もが応用・実践できる開発教育教材を今後も開発してください。

## 2) 実践事例収集による学習プログラムの発展

参加者に対し実践の相談を行うとともに実践の報告を呼びかけ、実践事例を収集していった。実践事例が増えることにより、学習プログラムのアレンジの幅が広がった。これにより、より多くの人が関心を持つ学習プログラムへと発展することができた。

## 3) 講座内容と実践事例情報を公開、共有

講座内容の詳細と実践事例をホームページ上に紹介し、広く一般の人が情報を得られるようにし、事業の受益者を増やした。本学習プログラムは開発教育にとどまらず、食育・環境教育に関心がある人にとっても実践しやすい内容となっているため、これをきっかけに、より平和・共生の社会を実現するための教育活動に参加していくことにつながると考えられる。



## 5. 今後の課題

### 1) 実践事例の効果的な発信

講座参加者から収集した実践事例を、本学習プログラムがさらに効果的に普及推進され、開発教育の実践者育成に役立てられるように、発信方法を考え、実行する必要がある。

### 2) 地方での講座の開催

当協会は、開発教育を推進するためのネットワーク団体であり、開発教育実践者の養成に果たす役割に対する全国のNGO・NPO・学校関係者からの期待は大きい。本事業の共催団体からは「今回のような体験講座の共催は、今後も機会があれば実施していただきたい」「可能な限り、地方でもイベントを開催してほしい。面白そうなワークショップやイベントがあっても、東京や大阪での開催が多く、地方からはなかなか参加することができない」「沖縄にいる私達にとっては、非常に貴重な体験となった」「交通費等負担なしの講師の派遣は、とても有難い」という意見が伝えられた。地方の団体は、財政が厳しいところが多く、また、講師派遣の交通費がかさむため、講座を依頼したくてもできない現状がある。当協会も無償で講師を派遣できるような資金がないため、今回の助成のように、講師派遣料（講師料・交通費）に使用できる助成は大変貴重である。

本事業を進める中で、共催団体と講座参加者から改めて当団体の意義が明確にされた。今後はさらに、地方での開発教育の普及・推進活動のための資金を継続的に獲得するよう努めていきたい。